

< 2018年11月 >

古賀 順子

「11月11日」

2018年11月11日11時、フランス各地で教会の鐘が鳴り響いた。四年間続いた第一次世界大戦の終結を告げる喜びと悲しみの鐘。朝から暖かい秋雨が降るパリの凱旋門では、マクロン大統領が戦没者を悼む炎を点し、世界70ヶ国の首脳を招いた「第一次世界大戦終結100周年記念式典」が行われた。一世紀が経ち、生きて戦争の悲惨を語る者がいなくなった今日、戦争の事実を伝え、未来への警鐘を担う歴史的な式典である。

1914年のヨーロッパは現在の地図とはかなり異なっていた。ドイツ帝国の領土は現在よりも広く、オーストリアとハンガリーはオーストリア・ハンガリー帝国の名で一国として統一され、ポーランドは国としては存在しておらず、トルコはオスマン帝国だった。イギリス・フランス・ロシアの「三国協商」に日本、イタリア、ポルトガル、ルーマニア、アメリカ、ギリシャ、ブラジルが加担し、対して、ドイツ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、イタリア(1915年陣を交える)の「三国同盟」が結ばれ、ブルガリアとオスマン帝国が加担。この戦争は各国間の領土争いが大きな要因で、フランスはドイツ領になったアルザス・ロレーヌ地方を奪回したく、イタリアはオーストリア・ハンガリー帝国と領土を争っていた。

1914年6月28日オーストリア・ハンガリー帝国の後継者でハプスブルク家フェルナンド大公がサラエボでセルビア人民族主義者に暗殺され、オーストリア・ハンガリー帝国はセルビアに宣戦布告、セルビアに加担するロシアがオーストリア・ハンガリー帝国に宣戦布告、ドイツがロシアに宣戦布告、ドイツがフランスに宣戦布告、イギリスがベルギーを助ける名目でドイツに宣戦布告・・・ヨーロッパ全体に戦火が及ぶ。さらに、イギリス、フランス、ロシアは海外に植民地を有しており、アフリカ、アジアも巻き込む。誰もが長くは続かない、年内には終結すると楽観視していた戦

争は、4年間の泥沼、大殺戮と化した。

フランス兵の死者140万、民間の被害者30万を加えると170万のフランス人が戦争の犠牲になった。1871年ドイツに占領されたアルザス・ロレーヌ地方は奪回できたが、人口の3割近くを失うという代償を払っている。フランスを旅行すると、どんな小さな町や村にも第一次世界大戦の戦死者名を刻んだ石碑があり、犠牲の大きさを実感させられる。

そして、この大戦の疲弊に拍車をかけるように猛威を奮うのが「スペイン風邪」である。中国で発生したウイルスがアメリカで突然変異し、感染力の強いインフルエンザ菌になり、兵隊の移動によって世界中で大流行した伝染病とされる。ヨーロッパで唯一第一次世界大戦に参戦していないスペインでその情報や免疫研究がなされことからその名が付いた。1918年大戦末期から翌1919年までに「スペイン風邪」で死亡した数は5000万以上と推定され、中世の「ペスト」(推定死亡数3400万)を超える驚異的な死者を出した。ギヨーム・アポリネール(1880-1918)、エドモン・ロスタン(1868-1918)、エゴン・シーレ(1890-1918)もその犠牲になった。

パリ・ブローニュの森にある「ルイ・ヴィトン財団」では、没後100年を記念したエゴン・シーレ回顧展が開会されている(2019年1月14日まで)。ギュスターヴ・クリムト(1862-1918)、オスカー・ココーシュカ(1886-1980)らとともに「ウイーン分離派」と称され、10月31日終戦間際に28歳の若さでこの世を去った。戦場に倒れた兵士、空襲や爆撃の犠牲になった民間人、スペイン風邪や戦争に疲弊し病気で死んでいった人々、家族や財産を失った人、戦争孤児など、老若男女を問わず多くの人々を犠牲にした。1918年に亡くなった無数の人々を思えば、四世代(100年)経った今も、学ぶこと、考えさせられること、伝えていかなければならないことが多く残されている。フランス軍36万、ドイツ軍34万の犠牲者(死者および負傷者)を出したヴェルダン(1916年2月から12月)の地(ロレーヌ地方)ヴェルダンでは、100年を経た11月11日、フランスとドイツの合同合唱団によるモーツァルト『レクイエム』、サン・サーンス『レクイエム』が奉納された。